

今の時代、強い者が傍若無人に振舞い、弱者を虫けらのように扱っても、それを止める手立てを持っていない。ロシアはウクライナに侵攻し、無辜の国民の命を奪い、生活基盤を破壊し続けている。イスラエルはガザのパレスチナ人を地獄の責め苦に追いやり、ジェノサイドを止めようとしない。日本では、自民党は金権まみれの政治体制を変えようとせず、国民は物価高に喘いでいる。強さを持つ権力者の傲慢にいたたまれない怒りを覚える。

本棚に、荒井献先生の『「強さ」の時代に抗して』というタイトルを見て、読み返す気になった。感銘を受け、続いて『イエスとその時代』、『イエスと出会う』、『同伴者イエス』を読んだ。博学とイエスに肉薄する情熱、説得力のある論考に感嘆させられた。

1974年に出された『イエスとその時代』を読んだ時、少なからず衝撃を受けたが、「あ、そうなんだ」と思った。私が卒業した東京神学大学生の時代には、聞いたことのない「史的イエス」像を浮かび上がらせている。徹底した時代考証を踏まえ、福音書の編集を分析し、人間イエスが何を語り、何をしたかを克明に解き明かしている。ただひたすらに、当時の政治的＝宗教的体制によって差別されていた「地の民」あるいは「罪人」のもとに立ち、民衆と共にあって、人間が人間らしく生きることを求め、その結果として遂には権力によって処刑されたイエス像であった。しかし、「正統神学」に連なる東京神学大学の教授たちには不評を買った。新約学の松永希久夫教授は「教会でこの本を取り上げて読む事は一向差し障りないが、それはおそらく反面教師として学ぶことになる筈で、元来、聖書の証言するイエスとは異なった種類のイエス像を提出しようとする意図している本だ」と評した。福音書で構成された「宣教のキリスト」からのイエス像を正しく理解すべきであるとの説である。聖書をバラバラに分解して、復活のイエスからの救済メッセージがそこにはないという批判であろう。しかし、史的イエス像は、民衆と共にあった韓国の民主化闘争を担った人々に受け入れられた。彼らは、聖書や当時の社会状況を文字上で研究したのではないが、民主化を求める命がけの闘いの体験から、荒井先生の描き出した史的イエス像に共感し、励まされた訳である。

その後、史的イエスの研究は多くの学者によって展開された。1980年、田川建三氏の権力に対峙する『イエスという男』の史的イエス像は、大学紛争に関わった学生、それに共感する牧師、キリスト者に絶大に支持された。史的イエスの研究は日本の教会の信仰のあり方を少なからず、変えたと言えよう。私の主イエス理解は荒井先生の論考に決定的に負っており、『イエスとその時代』は今では常識として受け入れられているのではないか。

荒井先生は、「知る」と「わかる」とは違うと言われる。「知る」ことは、自然・人文科学的な知性で、事柄を解明することである。だから、聖書の研究は信仰がなくても、学として成り立つ。「分かる」ことは、出会って関係を持つ中で、心で承服する人格的な営みである。復活信仰は「知る」ことでなく、「分かる」ことであろう。マルコ福音書16章7節に「さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。かねて言われたとおりに、そこでお目にかかれる』」と書かれている。ガリラヤに行き、捨て置かれた民衆と共に生きる時、復活のイエスにお会いできるという若者（天使）からの告知である。ガリラヤとは私たちが生活している現実である。そこで、苦悩を分かち合う具体的な体験から、イエスの復活を「分かる」こととして受け止められる。強い者たちの横暴に怒り心頭だが、「罪人」と共にあった史的イエスを見つめ、死を超えた命、復活の望みに生きよということなのだろうか。